

魂の灯りの 宗教の力強さ

はじめに

私が初めてインドを訪れたのは、祖父の遺言により
遺灰をガンジス河に流すためでした。

祖父は亡くなる直前、枕許に私を呼び「お前はイン
ド哲学を勉強しているのだから、インドに行きたがる
う。俺の骨をガンジス河に撒いてきておくれ」そう言
い残して不帰の旅路に就きました。
やがて、私は釈尊の遺跡を尋ね、そのつど分骨して
祖父の希望どおり遺骨をインドの大地に返しました。

いくつかの遺跡を巡礼してましたが、8年たつた今
も忘れることの出来ないのが、ベナレスの街の対岸に
昇る紅い太陽と朱に染まってボンヤリ霞む水浴場（ガ
ート）です。

私は、小船を浮かべ紅を流した様なガンジスの水面
に最後の一握りの遺骨を撒き、綿をしきつめた様な水
面から静かに深い緑の水中へと潜むそれを不思議にも
涙の一粒もこぼさず眺めていた自分を、今もはつきり
思い出せるのです。その時私はようやく祖父の死をの
りこえられたのでしょう。私はおじいちゃん子として
育てられた為、祖父の死は、大きなショックだったのです。



東方研究会研究嘱託

保坂俊司

そして、私はその時、またいつか必ずこの地に祖父を訪ねようと心に誓いました。

それが思いもかけず恩師中村元先生の御厚意と阿部慈園師の尽力により第一回東方研究会派遣留学生として、祖父の眠るインドの大地を踏めることになったのです。その喜びは尋常のものではありませんでした。

私の留学は首都デリーの郊外にあるデリー大学に籍を置きつつ、インドの現代宗教の現況を歴史を踏まえつつ研究することになりました。従つて、私は留学中の二年余りを多くの人々に会い、色々な場所を尋ねることに費やそうと考えておりました。それは、インド人の中に息づく宗教をじかに体験したかったからです。それは第一回目の旅行の時に受けた衝撃と驚きによつて、すっかり現代のインドに魅了されてしまつたからに外なりませんでした。

特に貧困や飢餓の暗黒の中、人々の心の中に燃え続ける魂の灯りである宗教の力強さに驚きをおぼえました。

それは我々日本人が物質文明の発達とともに、過去の世界に置き忘れてしまつた人間性、つまり心の豊かさを示しているのではないかと思われます。

朝な夕な寺院に少しばかりの貢物を持って孫達の手を引いてお参りを欠かさない老人や、出勤前に必ず寺院にその日の無事を祈るサラリーマン、それがあたりまえのこととして行われているインドでは、神々と人間は一体となつて相互に不一不二の協調関係にあるのです。

長くインドに居れば居るほど神様というものが不思議と身近になつてくるのです。昔の日本でも村外れには必ず石の地蔵様や道祖神等があり、信仰という様な堅苦しいものではなくて、神仏は身近な存在だつたと聞きます。インドでは今もこのような信仰が生きているのです。

あるインド人が「インドでは一年の内お祭のない日はないのだよ」と教えてくれました。確かに学校は休祭日が多く、加えて個人的な信仰から休講にしてしま



う先生や生徒も多いのです。人々は多くの神々をどれもこれも軽んずることなく崇めているのです。

ただ、残念なことに我々日本人が考えるほどに、仏教はインドの現実社会では親しみがあるわけではありません。

仏教の聖者のゴータマ・ブッダはヒンドゥーの神様の生まれ変わりと考えられており、仏教はヒンドゥー教の一派として、一般のインド人に考えられているのです。

したがって、特別に仏教を問題にすることは印度の人々にとっては余り意味のことなのです。

二年余りの留学体験は、日本の常識である「インドは御釈迦様の生誕の国である」ということの否定からはじまりました。つまりインド社会との格闘は、根本的な私のインド観を粉碎することからはじめました。

私は真夜中、ただ独人取り残された自分に、これから始まる、生活の運不運を考えて暗い気持ちに、思わず憂鬱になってしまったのでした。

私がようやく税関を通過した時には、インドの大地にあのベナレスで見た様な紅い太陽が顔を出しておりました。「神も仏もないものか」と心の中で呟いてしまいました。

私のそんなインド観は、しかしものののみごとに崩壊しました、それもデリー空港についた途端であります。

勿論、前回の旅である程度は心得ていたつもりでした。しかし、たったの一人のインドでの生活の第一日から、立ち往生するとは思いもよらず、そうでなくとも心細いことこの上ないのに、真夜中にただ個人空港の税關のカウンターに四時間近く足止めされ、その歓迎の荒っぽさに半べソをかいていたことを今でも昨日のことの様におもえてなりません。

(つづく)